

演題名：過敏性腸症候群における自律神経機能の検討

演者：○神谷 武、鹿野美千子、田中 守、塚本宏延、馬淵元志、海老正秀、平田慶和、水島隆史、村上賢治、志村貴也、溝下 勤、森 義徳、谷田諭史、片岡洋望、城 卓志

所属：名古屋市立大学大学院消化器・代謝内科学

抄録

背景および目的；過敏性腸症候群(Irritable bowel syndrome:IBS)は、便通異常と腹痛を慢性的に呈する機能性疾患である。IBS の病態生理は多岐にわたるが、近年脳腸相関の概念が導入され脳と腸の相互関係が注目されている。自律神経は脳、腸間の求心路、遠心路として結ぶ経路であり、その機能異常は IBS の病態と関わりあう可能性がある。今回、IBS 患者における自律神経機能を検討することを目的とした。

方法；対象はローマⅢ基準をみたす IBS 患者 20 名である。自律神経機能の測定には心拍変動解析法を用いた。左右前腕、および右頸部に心電図電極を装着し、座位での安静状態で 3 分間、ついで起立負荷を行い立位で 3 分間心電図を測定した。測定データはクロスウェル社製心拍変動波形解析ソフトを用いてリアルタイム解析を行った。心拍数、心拍変動の低周波成分(LF)、高周波成分(HF)、および心拍変動係数(CVRR)を算出し、LF/HF を自律神経バランス (交感神経の指標)、CVRR・HF を副交感神経の指標、CVRR を自律神経活動の変動とした。これらの値を健常者より算出した正常値と比較検討した。

結果；安静時には、LF/HF の高値および不安定な心拍数を約 40%の患者に認めた。また CVRR の増加を 30%に認め自律神経活動変動の大きさを反映していた。立位負荷後には、心拍数変動が過大である患者を約 40%に認めた。LF/HF の反応低下、反応の乱れを 60%以上に認めたが、反応亢進例は見られなかった。CVRR・HF の反応は亢進、低下、乱れがそれぞれ 30%ずつ認め。正常例は 10%であった。

結論；IBS 患者では、安静時には交感神経優位の傾向がうかがわれ、また立位負荷に対して多くの例で異常反応を示した。これら自律神経機能の異常は、IBS の病態に関与している可能性が示唆された。